

文学分野

ユーラシア古語文献の文献学的研究

メンバー

哲学、歴史学、文学の3分野にわたる以下30名の研究者によって構成される。

a) 中央アジア

庄垣内正弘（京都大学大学院文学研究科教授）

樋口康一（愛媛大学法文学部教授）

吉田 豊（神戸市外国語大学外国語学部教授）

西村多恵（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

大崎紀子（京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員）

b) 西アジア

久保一之（京都大学大学院文学研究科教授）

近藤真美（龍谷大学文学部講師）

前川和也（京都大学人文科学研究所教授）

稲葉 穰（京都大学人文科学研究所助教授）

堀川 徹（京都外国語大学外国語学部教授）

井谷鋼造（追手門学院大学文学部教授）

川本正知（奈良産業大学経済学部教授）

新谷英治（関西大学文学部教授）

小野 浩（橘女子大学文学部教授）

c) インド・チベット

徳永宗雄（京都大学大学院文学研究科教授）

御牧克己（京都大学大学院文学研究科教授）

赤松明彦（京都大学大学院文学研究科教授）

武内紹人（神戸市外国語大学外国語学部教授）

d) 中国

平田昌司（京都大学大学院文学研究科教授）

木津祐子（京都大学大学院文学研究科助教授）

e) 日本・朝鮮

日野龍夫 (京都大学大学院文学研究科名誉教授)

木田章義 (京都大学大学院文学研究科教授)

田窪行則 (京都大学大学院文学研究科教授)

大谷雅夫 (京都大学大学院文学研究科教授)

大槻 信 (京都大学大学院文学研究科助教授)

f) ロシア・東欧

佐藤昭裕 (京都大学大学院文学研究科教授)

g) 小アジア

吉田和彦 (京都大学大学院文学研究科教授・リーダー)

h) 西欧

中務哲郎 (京都大学大学院文学研究科教授)

高橋宏幸 (京都大学大学院文学研究科教授)

家入葉子 (京都大学大学院文学研究科助教授)

研究会の趣旨

人間が過去の事物に関心を寄せるひとつの理由は、不確かな現代を理解し、未来を予測するための何らかの材料が過去の事物に隠されていると信じるためである。そして研究者は文学、歴史学、仏教学、言語学などさまざまな領域を通して過去を扱う。ここで使用される古文献の多くは、どの領域においても一度は文献学的手法を用いて研究資料として利用可能な程度のテキスト化（転写、翻訳、注記、校訂など）がおこなわれる。だが、そのような研究資料の多くは個々の研究者によって作成されたままで、一般に公開されることは少ない。

本研究では、ウイグル語、ヒッタイト語、古ロシア語などのユーラシア古語テキストに対して、文献学的な検討を加え直したうえで、整備されたかたちで公開し、各領域を通して共有できる資料を作成することを目指す。文献の種類によってはテキストの提出が非常に困難な作業であり、それ自体が主たる研究目的となるものがある。そのような作業に対してはそれを円滑に進め、成果の公開を促す環境を整えたい。また、提出されたテキストを基礎にした、特定のテーマについての体系的な文献学的研究も推進していきたい。さらに、言語の種類とテキスト化の関係

については、これまであまり議論されることはなかった。ここではテキスト化が言語によって如何に異なる手法をとるかについて考察し、各言語に共通するテキスト化の手法の開発を検討したい。

古文献の文献学的整備とその公開は、過去を扱う各領域の研究に直接役立ち、グローバル化時代の通文化的な研究への基礎的研究として有意義な役割をはたすだろう。また若手研究者の育成に向けても、重要な研究資料として位置づけられるであろう。

活動状況

1. 活動の記録

2002年11月の研究会発足以降、2003年6月までの間に以下の通り4回の研究会が開催された。

第1回研究会（第49回羽田記念館講演会と共催）

日時：2002年11月23日（土）午後2時～

場所：京都大学文学部 羽田記念館

報告者：重松伸司 追手門学院大学文学部教授

題目：アジアのアルメニアン・コミュニティ
 墓碑銘・口承・植民地公文書から

報告者：花田宇秋 明治学院大学教養教育センター教授

題目：イスラムの統合性（求心性）と分散性（遠心性）の源流

第2回研究会

日時：2002年12月2日（月）午後2時～

場所：京都大学文学部 羽田記念館

Aleksei Sazykin博士を囲んで

司会：樋口康一 愛媛大学法文学部教授

テーマ：モンゴル語仏典の文献学的研究

Aliy Kolesnikov博士を囲んで

司 会：吉田豊 神戸市外国語大学外国語学部教授
テーマ：イランのササン朝後期から初期イスラム時代の文献学的・
歴史学的研究

第3回研究会

日時：2003年2月22日(土)午後2時～
場所：京都大学文学部 羽田記念館

報告者：吉田和彦 京都大学大学院文学研究科教授
題 目：言語分析にグローバルな視点がなぜ必要か

第4回研究会(第50回羽田記念館講演会と共催)

日時：2003年5月24日(土)午後2時～
場所：京都大学文学部 羽田記念館

報告者：新谷英治 関西大学文学部教授
題 目：地中海航海案内書の世界
報告者：熊本裕 東京大学大学院人文社会系(文学部)教授
題 目：コートン語Maitreya-samiti「弥勒会见記」について

研究会報告の要旨

第1回研究会

アジアのアルメニアン・コミュニティ－
墓碑銘・口承・植民地公文書から

重松 伸司

アルメニアに関する研究には二つの傾向がある。一つはアルメニア語の言語学的研究、もう一つはあるいはアルメニア民族の民族興亡史、とりわけ少数民族の視点に重点を置いた、ササン朝ペルシャやオスマント

ルコによるアルメニア迫害史といったようなジェノサイドあるいは民族離散（ディアスポラ）という側面からの研究である。

発表者はこういった観点には立たず、ベンガル湾を一つのアジア特有の海域圏としてとらえ、その海域世界で交易・通商・通信業務を行ってきたアルメニア人という非常に小さなコミュニティーがどのような活動をしてきたのかを考察する。

ベンガル湾海域の各地域にはアルメニア通り・アルメニア街という地名が随所に残っている。またアルメニア教会も点在していることから、インドや東南アジアにアルメニアン・コミュニティーが存在していたことがわかる。しかし、現在アジアでのアルメニア人の活動や経路に関する研究はほとんどない。

調査方法としては、断片的に存在するアルメニアに関する足跡を残した資料を拾い集めて再構築を試みる。主な資料としては以下の5種類の資料がある。

1. 墓碑銘　　アルメニア語と当地で話されているヨーロッパの言語によるバイリンガル表記の墓標。（1600年～1900年頃）
2. オーラルヒストリー（口承）　　シンガポール政府が民族融和をはかり作成したCommunities of Singapore という聞き取り資料。（1900年～1980年）
3. 同時代資料　　当時のアルメニア人の動向を示した新聞記事や英・蘭の作成した紳士名鑑など。（17世紀～20世紀初頭）
4. 植民地資料　　英・蘭・仏の商人・仲介商人の記録や東インド会社の交易記録・植民地関係資料など。（17世紀～19世紀半ば）
5. Personal Memoirs　　仲介商人の記録など。

時代毎に断片的に存在するこれらの資料を整合させ、個々のアルメニア人の出身地、定住地、死亡した地を追跡し、彼らがどのような経路を経て、どのような生業を営んでいたかということが断片的ではあるが再構築できる。

このような再構築作業からアルメニアン・コミュニティーはインドの内陸部ガンジス河流域沿いの主要な都市や海港都市、マラッカ海峡の主要な海上交易地に点在していたことが確認でき、アルメニア人は海上および内陸において主要な貿易ネットワークをもっていたことがわかる。

よってアルメニア人は南アジア・東南アジアにおいてヨーロッパ各国やアジア諸国間の通商の仲介者となって国際貿易を展開していたことが推定される。

さらに、植民地資料を詳しく調べるとポリティカルエージェントと称されるアルメニア人が登場することから、語学に堪能であったアルメニア人がヨーロッパによる植民地支配拡大の仲介の役割を担っていたのではないかと提言する。

第1回研究会

イスラムの統合性（求心性）と分散性（遠心性）の源流

花田 宇秋

イスラムには2つの相反する傾向がある。1つはイスラム諸国会議、アラブ連盟等を初めとした強い統合性をもとうとする傾向であり、もう1つは昨今世界の注目を浴びているいわゆる「イスラム原理主義者」の行動のように他のイスラム教徒に対して分散的な方向に向う傾向である。発表者は、この2つの相矛盾する傾向の源流が初期イスラムの時代から存在し今日までつながっていると考える。

預言者ムハンマドによる「別離の巡礼」の際の説教の内容については、従来の研究があるが、発表者は諸史料の記述を検討することにより、ジャマアへの付着、ウーリル・アムルという2つの言葉に着目し、史料・研究を詳細に検討することにより、それが何らかの党派性の表れを反映したものではないかと考える。

まず、ウーリル・アムルについては、訳語が様々であるが、既にタバリーの時代に、この言葉が何を示しているのかについて諸説あったことがわかる。しかし、史料にこの語が記されていること自体が、権威ある者への服従を強調する、一定の政治的・宗教的思想の反映であると考えられる。

ジャマアについては、後に「イスラム共同体」の意味をもつように

なる。しかし、ムハンマド時代においてはその意味はなく、特にウンマトの関係でいえば、ウンマの統一・団結を意味した。共同体としてのジャマアは、カリフ制の成立が直接の契機となっているといえる。ムハンマド没後の混乱・分裂を防ぐため、イスラム教徒が団結する必要性があったのである。ただし、このカリフ権力はカリフが善行に励むかぎり合法であり、悪行に走るならばイスラム教徒はカリフに従う必要はない。つまりカリフ制そのものに統合性と分散性が同時に内在しているのである。第1次内乱の争点も、同様の文脈から理解することができる。第1次内乱の後成立したウマイヤ朝は、自らの正当性を主張する手段としてジャマアを強調し、イスラム社会は統一された政治体でなくてはならず、それを現実には握っているのが自分たちであり、そのジャマア国家に従うことがイスラム教徒として肝要だとした。この思想は、アッバース朝に引き継がれていく。

第2回研究会

Aleksei Sazykin博士を囲んで

司会 樋口 康一

Aleksei Sazykin氏は、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルグ支所上級研究員。来日は三度目という氏を囲み、かねて氏と共同研究を進めている愛媛大学の樋口康一氏が司会を務めた。同支所における研究の現状が報告されたあと、日本とロシアにおけるモンゴル語仏典の文献学的研究に関して、参加者と知見の交換がなされた。

オルデンプルグの収集品に端を発する、上記研究所支所の所蔵にかかるモンゴル語仏典類は、大小取り混ぜ、1000点近くに上る。その目録を出版できたのは、主として氏の貢献によるものである。

大部の完本から微細な断片に至るとりどりの所蔵品の中には、未報告の逸品も少なからず含まれている。氏が現在草稿を完成しつつある『文殊師利一百八名梵讃』もその一つであるが、奇しくも、樋口氏もこの仏典のテキスト校訂と言語特徴の記述を進めており、両者を併せれば、現

在報告されているこの仏典の全版本・写本を糾合した研究となることが確認された。研究会の席では、この仏典に関する、ウイグル・チベット・西夏サイドからの情報提供も行われ、実り多い討論が展開された。

また、モンゴル文字は、縦書き右行が通例であるが、他に類例のない左行する珍品も紹介され議論を盛り上げた。

第2回研究会

Aliy Kolesnikov博士を囲んで

司会 吉田 豊

2002年12月2日(午後2時～5時) 羽田記念館において、ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクト・ペテルブルグ支所上級研究員のAliy Kolesnikov博士を招いて、研究討論会を行った。討論は英語で行われた。

Kolesnikov博士はササン朝が発行したコイン、とりわけ銀貨を扱った貨幣経済史の専門家であり、最初に博士から、最近の著書 *Denezhnoe xozjajstvo v Irane v VII veke* (7世紀イランにおける貨幣経済)、Moscow, 1998 の内容の紹介をしていただいた。その後、司会の吉田豊氏が所有する2枚のササン朝の銀貨(ホスロ2世の時代の末期のもの)を使って、コインの分析する際の問題点を例示していただいた。

この後、質疑応答に入り活発な討論が行われた。テーマの一つは、イスラム時代の歴史家たちがササン朝の歴史についての行なった記述はササン朝史の最も重要な史料になるが、その記述の一部は銀貨を分析することによって改めることができるというKolesnikov博士の主張は、具体的にどの史料のどの記事であるのかについてであった。その過程で、博士の所属する研究所が保管する、イスラム史料の重要な写本の現在の研究状況について貴重な情報を得ることができた。また別のテーマは、ササン朝イランの税制に関するもので、『魏書』「西域伝」の波斯国の条に見える「賦税則準地輸銀錢」はホスロ1世の税制改革を前提にした記事かどうか議論された。

また税制との係わりでは、1950年代に中華人民共和国の新疆ウイグル自治区の西端にあるカシュガル付近で発見された銀貨（ササン朝の銀貨とアラブ・ササン銀貨）に見える針書きや墨書の書き込み（一部はシリア文字による）が、イランで発見される銀貨に見られる類似の例と比較して、ササン朝時代のイランにおける納税者の名前を示すものかどうかについても議論が交わされた。

銀貨の銘文に関するテーマでは、ササン朝初期の銀貨の銘文が長文で複雑なのに比べて、後期の銀貨では王の名前だけになる理由について検討した。ササン朝の初期はパルティア朝から王権を篡奪した直後であり、ササンの諸王の王権に対する正当性を主張することが重要であったためであろうという結論に達した。別に、ササン朝の東方地域で発見される銀貨にしばしば認められるカウンターマークについても意見の交換が行われた。

質疑応答の後には、立食パーティーが催され、参加者は白熱した議論で渴いた喉を潤した。熱心な参加者たちはその席上でも、新出の資料や互いの研究について情報交換を行なった。

第3回研究会

言語分析にグローバルな視点がなぜ必要か

吉田 和彦

比較言語学は、同系統に属する諸言語が共通祖語の段階からどのような変化を受けた結果、成立したのかを証明してくれる。また、そこで用いられる比較方法と内的再建法は、個々の言語の先史を復元するうえで、もっとも有効な手段である。この報告では、ホメーロスとリグ・ヴェーダにみられる韻律の問題を取り上げ、それぞれの言語内部からだけでは不可解な現象に対して、比較言語学はどのような説明を与えるのかを示した。

ホメーロスの叙事詩は、いわゆる長短短6歩格（dactylic hexameter）を用いて書かれている。すなわち、1行は6つの詩脚（foot）で構成され、

ひとつの詩脚は長音節ひとつと短音節2つか(- UU)、あるいは長音節2つ(- -)から成る。ただし、行末の6番目の詩脚は長長(- -)、あるいは長短(- U)に限られる。長音節とは長母音を含む音節、あるいは短母音に2つ以上の子音が続く場合である。二重母音を含む音節も一般には長音節とみなされるが、語末に立ち、つぎの語が母音で始まる場合は単音節とみなされる。

さて問題となるのはイーリアス第9書415行目の4番目の詩脚である。

ὄλετό μοι κλέος ἐσθλόν, ἐπὶ δηρὸν δέ μοι αἰὼν
 - UU | - UU | - UU | U - | - UU | - -

ここでは、長音節2つ(- -)の長長という詩脚が要求される。2番目の長の位置には、δηρὸνのηを含む音節がくるので問題はない。ところが、1番目の長の位置に立つのは、ἐπὶの短いιを含む音節であり、またιの後にはδという子音ひとつしか後続しないため、韻律が要求する長音節には決してならない。このような韻律からの逸脱は、ホメーロスのテキストにみられるまったく不可解な現象であり、ギリシア語の視点からだけでは説明不可能に思える。しかしながら、比較方法はこの問題に対して整合性のある説明を与えてくれる。

以下に示したのは、語頭にdを含むギリシア語とそれに対応するサンスクリット語とアルメニア語の形式である。

	ギリシア語	サンスクリット語	アルメニア語
“ten”	δέκα	dása	tasn
“twice”	δίς	dvís	erkic’s

この例から、ギリシア語のdに対して、サンスクリット語とアルメニア語は2つの違った対応を示しており、それぞれ印欧祖語の*dと*dwに遡ることが分かる。

ギリシア語	サンスクリット語	アルメニア語	印欧祖語
δ	d	t	*d
δι	dv	erk	*dw

うえの $\delta\eta\rho\acute{o}\nu$ に対応する形式として、アルメニア語は *erkar* を持っている。したがって、語頭の δ は **dw* に遡ることが分かる。言うまでもなく、ホメーロスの叙事詩は、実際に記録される以前から吟唱されていた。その段階においては、問題の $\delta\eta\rho\acute{o}\nu$ は $\delta F\eta\rho\acute{o}\nu$ と読まれていた。この場合、 $\acute{\epsilon}\pi\iota$ の母音 $\acute{\iota}$ の後には δF という子音2つが続くために、 $\acute{\iota}$ を含む音節は長音節となり、韻律の違反はなかった。韻律に合わないようにみえる理由は、ギリシア語内部の後の先史に * δF - δ - という音変化が生じたからである。

他方、リグ・ヴェーダの韻律を支配するのは、音節の数である。たとえば、*gāyatrī* という韻律では、1行 (*pāda*, *verse*) が8音節から成り、3行で1連 (*ṛc*, *stanza*) を構成する。ところがリグ・ヴェーダ1, 1, 8a *rājantam adhvārāṇām* では、*gāyatrī* であるにもかかわらず、7音節しかなく、韻律に合わない。ところで、この行で用いられている *adhvārāṇām* は複数属格の形であるが、リグ・ヴェーダにおいて複数属格語尾 *-ām* はそれが出現する事例のおよそ3分の1で、2音節の *-aam* と数えられなければ韻律に合わない。同様に、*a*-語幹の単数奪格語尾 *-āt* も *-aat* というように2音節として読まなければ、韻律に合わないケースが多くみられる (e.g., *sadhāsthāt* RV 8, 11, 7b = *sadhāsthaat*)。

内的再建法を適用するならば、2音節として数えられるこれらの長母音は、もともとは母音間に子音を持つ **-VCV-* という連続であったと解釈することができる。すなわち、母音間で子音が脱落し、その後母音融合によって長母音が生じたという解釈である (**-VCV-* > **-VV-* > *-V̄-*)。そして2音節として数えられるのは、母音融合が起こる前の古い状態を反映していると考えられる。インド・イラン語派では、母音間の子音は一般に保存されるが、唯一脱落したと考えられる子音がある。それは、いわゆる喉音 **H* (laryngeal) である。以上から、複数属格語尾 *-ām* (*-aam*) は **-VHVm*、単数奪格語尾 *-āt* (*-aat*) は **-VHVd* (古ラテン語の **-ād* を参照) に遡ると考えられる。

複数属格語尾と単数奪格語尾に喉音が存在していたというインド・イラン語派から得られた知見は、ゲルマン語派とバルト・スラブ語派にみられる歴史的音韻変化を理解するうえできわめて重要な役割を果たす。これまでの研究では、ゲルマン祖語とバルト・スラブ祖語の語末音節には、2モーラ長母音と3モーラ長母音の対立があり、分派諸言語で2モー

ラ長母音は短母音、3モーラ長母音は(2モーラ)長母音で現れると一般に考えられていた。たとえば、ゴート語**baira** [-a] “I carry” (< *-oo; ギリシア語 φέρω “id.”)とゴート語**ga-leiko** [-o:] “like” (起源的には単数奪格)(< *-oood)において語末母音に長短の対立があるため、祖形は2モーラ長母音(*oo)と3モーラ長母音(*ooo)を含んでいたと従来は考えられていた。しかしながら、言語類型論的にみて非常にまれな2モーラ長母音と3モーラ長母音の対立を考える必要はもはやない。インド・イラン語派の事実などから単数奪格語尾が*-o-Hedと再建できるからである。うへのゴート語**baira**と**ga-leiko**はつぎのように自然に導かれる。

	*-ō	*-o-Hed
語末音節短縮	*-a	*-oHd
残りのHの消失		*-ōd
	baira [-a]	ga-leiko [-o:]

第4回研究会

地中海航海案内書の世界

新谷 英治

古くから地中海では航海案内の書物や海図として水路誌periplus、島嶼誌isolarioさらにはポルトラーノportolanoが発達した。ポルトラーノは13-17世紀頃を中心に用いられ、文章型ポルトラーノと地図型ポルトラーノが知られる。16世紀前半のオスマン朝でピーリー・ライースPīrī Ra'īs (1465ないし70年?-1554年頃)によって編纂された地中海航海案内書『キターブ・バフリエ』*Kitāb-i Bahrīya*は、文章型ポルトラーノに似ながらも、いくつかの異なる特徴を有する書物である。原本は次のように2種作られており、それぞれから少なからぬ写本が製作されている。

927年本：ヒジュラ暦927年(西暦1521年)に成立

932年本：ヒジュラ暦932年(西暦1526年)に成立

オスマン朝の地中海上での活動は15世紀に活発化する。オスマン朝は16世紀前半Khayr al-Dîn Pashaらが活躍したPrevezaの海戦での勝利を経て地中海に覇を唱える。ピーリー・ライースは、オスマン朝の地中海上での隆盛期の海軍提督のひとりであり、『キターブ・バフリエ』のほかに次の世界図2点が彼の作として今日に伝わっている。

ヒジュラ暦919年世界図（1513年:トプカプ宮殿博物館 Ms. Revan 1633m）

ヒジュラ暦935年世界図（1528-29年:トプカプ宮殿博物館 Ms. Hazine 1824）

『キターブ・バフリエ』932年本系写本を検討すると、本文の構成や内容にいくつかの特徴的な事実を指摘できる。また、『キターブ・バフリエ』の情報源を特定することはできないが、航海者としての著者の直接体験、仲間から得た生の情報、先人の著作から得られた知識が一体となり、再度整理され秩序付けられたものと考えられよう。なお、927年本系写本は932年本系写本とは内容・構成の点で異なる点が見られ、興味深い。

『キターブ・バフリエ』の付図のうち、Venezia図とAlanya図に注目して諸写本を比較するとVenezia図とAlanya図いずれの場合も927年本系写本と932年本系写本の間では異なる図が描かれており、また同系統写本間においても「生い立ちの異なる」地図が使用されていることが知られる。付図の分析は写本系統の整理などに資するところが大きいと考えられる。

『キターブ・バフリエ』932年本系写本にある韻文序は927年本系写本には無く、932年本の大きな特徴である。932年本韻文序は4部からなる（導入、航海者のための基礎知識、「七つの海」、結び）。比較的整然とした構成が意図されているが、叙述内容と構成に不均衡や揺れも見られ、特に「七つの海」の説明において顕著である。

932年本韻文序からは、次のような点が知られる。

基本的姿勢として、知識の及ぶ限り広く世界の事情を書き記そうとしている。

各地域・海域に一貫した項目立てが意識されていない。叙述の密度

にもむらがある。

ポルトガル人に依存した叙述が認められる

スペインの活動については、コロンブスの部下であった人物からの情報が多かったと思われる。

932年本韻文序は、新大陸を含めて広く世界を視野に納めているが、内容と構成に不均衡や揺れが見られ、その意味で不十分なものと言わざるを得ない。しかし、ピーリー・ライースが新しい世界像の把握に意欲的であり、2種の世界図からも知られるとおり、最新の情報を入手し記録している点は評価されるべきであろう。

ピーリー・ライースは地中海における航海の伝統を吸収しつつ詳細な『キターブ・パフリエ』本文を纏め上げる一方で、932年本韻文序、および別に作製した世界図において、地中海を越えた世界の有様を描いた。オスマン朝にとって地中海だけで自己の海上活動が「完結」する時代が終わり、地中海を超えた世界に注目せざるを得ない新しい時代が到来しつつあったことを物語るものと言えよう。

第4回研究会

コータン語の「彌勒會見記」(Maitreya-samiti)について

熊本 裕

The legend of the Buddha Maitreya, a wide-spread Buddhist legend of the future savior of the world, evolved through translations and adaptations in a number of Pre-Islamic Central Asian languages. Here I would discuss the Middle Iranian Khotanese version, since other versions, such as Tocharian and Old Turkic (also called Uigur or Old Uigur), have been extensively discussed upon in recent years by specialists in those languages, because of the discoveries and publications of new manuscript fragments. Compared to this the Khotanese version has rather been neglected. What is important in

the case of the Maitreya legend is, unlike the translations of the Buddhist canonical texts, the scriptures, this text develops in the course of diffusion from language to language. It is therefore not possible to leave out the Khotanese Maitreya text in order to obtain an overall picture of the development.

One of the most extensive pieces of religious literature in Pre-Islamic Central Asia is Old Turkic *Maitrisimit*, which is now found in two versions, one from Sängim and Murtuq in the Turfan oasis and the other from Hami. One of the colophons of the first version was deciphered in 1916 by F. W. K. Müller and Emil Sieg, who indicated that the Old Turkic version was translated from the *Tw ry* language (which gave rise to the designation of “Tocharian”) and that it ultimately goes back to the Indic (Sanskrit) original. The first part of this statement seems to be confirmed through the publication of the fragments of the “Tocharian” version, while the second part has often been considered suspect. In fact the known Sanskrit versions of the Maitreya legend, the *Maitreyavyākaraṇa* in the Gilgit and Calcutta manuscripts as well as the *Maitreyāvadāna*, which is the third chapter of the *Divyāvadāna*, not only are far shorter but also lack some important parts altogether as compared to the 28 chapters (or “acts”) of the Uigur *Maitrisimit* (and presumably the very fragmentary Tocharian *Maitreyasamiti-nāṭaka*).

The Khotanese version is somewhat in between in length. It occupies the central part of the 22nd Chapter (of 24 extant Chapters) of the so-called *Book of Zambasta*. The first eight folios of this chapter are lost, so we do not know how the chapter began. The end of the chapter is apparently the end of the frame story where the Buddha teaches Ānanda the serious consequences of unlawful acts even under Maitreya, so the beginning of the chapter would have been the first half of the frame story. The preserved part begins with an episode where the Buddha entrusts his Śāsana (“Teaching”) to Mahākāśyapa just before his Nirvāṇa. Here the text seems to allude to the “Account of the duration of the Law enounced by the Great

Arhat Nandimitra” 「大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記」 with a list of 16 Arhats. It is certainly not a part of the *Mahāparinirvāṇa-sūtra* as supposed by the first editor of the text, Ernst Leumann. In spite of the title of Leumann’s book there is absolutely nothing to warrant the use of the word *Maitreya-samiti* in the text of the Khotanese Maitreya story proper (22.112 - 22.311). The Khotanese version has all the ingredients of the Sanskrit *Maitreyāvadāna*, but greatly expanded. At the same time some proper names correspond to the *Maitreya-Vyākaraṇa* and the Chinese versions rather than to the *Maitreyāvadāna*. Although the Khotanese version alone belongs to the Mahāyānist tradition (with the mention of the “Mahāyāna-sūtras” in Z 22.226), there are very few explicit traces of the Mahāyāna within the text.

In the whole Maitreya legend the episode of the destruction of the pillar by the Brahmins is a decisive turning point, which led Maitreya to realize the impermanence of the material world. Most of the painters who decorated the walls and ceilings of the cave temples in Dunhuang and its vicinities with the scenes from the Maitreya-sūtras did not fail to include the “pillar destroyed”. However, the Chinese word used in the translation of Sanskrit *yūpa* “post, pillar” is generally *chuang* 幢, whose primary meaning is “banner, streamer” made of cloth and hung from a tall flag-pole, and which generally translates Skt. *dhvaja, ketu* (“flag, banner”). In the paintings it seems that a conflation has occurred with another meaning of *chuang*, namely “a multi-storied stone pagoda as a Buddhist monument”, which is also very far from the Sanskrit *yūpa*. The scenes from Mogao Cave 148 (High Tang), Cave 186 (Middle Tang), Cave 9 (Late Tang), and Cave 61 (Five Dynasties) all show multi-storied, pagoda-like, round towers. The famous Maitreya scenes from Cave 25 of the Anxi Yulinku 安西榆林窟 (Middle Tang), which show a two-storied, square building, are based on Kumārajīva’s Chinese version, which abandons *chuang* and uses *qibao tai* 七寶臺 “seven-jeweled platform” for translating *sapta-ratna-mayaṃ yūpam* “a post adorned

with seven jewels”.

Although the Sanskrit *Maitreya-Vyākaraṇa* ends without the episode of visiting Kāśyapa in the mountain, the shorter *Maitreyāvadāna*, which contains this episode, shows that it was associated with the Maitreya cycle at an early date. In the Dunhuang paintings, on the other hand, it is the concluding part of the Maitreya story. Moreover, it is shown in the chronological classification that in High Tang and Middle Tang most of the paintings have this scene, but the number of caves having it sharply decreases in Late Tang and Five Dynasties, and in Song there is none. This tendency may be reflected in the difference between the two Sanskrit versions. It is also shown that the episode of the “Glimpse of the Hells” which follows the mountain scene in the Khotanese version was not a part of the story in Dunhuang, nor is there any trace of it in the Sanskrit versions. It could have been added in the west, and it is a link that connects the Khotanese version with the Tocharian-Uigur versions, where four verses in the Khotanese are expanded to six full chapters in the latter.

In conclusion, the comparison of the components of the Maitreya legend in various appearances reveals that the Khotanese version occupies a place that bridges the Sanskrit texts and the hugely expanded Tocharian-Uigur versions. At the same time the Dunhuang paintings can show which elements were fashionable in different periods during the second half of the first millennium.

今後の活動

本研究会「ユーラシア古語文献の文献学的研究」は、羽田記念館を活動の拠点として、学内・学外さらには海外の研究者も含め、多彩な活動を行っている。2003年7月には2回の研究会が開催され、佐藤昭裕（京都大学大学院文学研究科教授）ならびに菅原睦（東京外国語大学外国語学部助教授）が研究報告を行う。また、2003年11月には、ロシアから研究

者を招聘して研究会を催す予定である。今後とも、活発な研究活動を行い、研究会等をより盛んに企画していきたい。

雑記

本研究会の補佐員は、2002年11月から2003年3月31日まで西村多恵（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）が務めた。2003年4月1日以降は大崎紀子（COE研究員）が務めている。